

ごんぎつねの里と兵十の家の空間的理解

A Study on the Gongitsune:
the Landscape and the House Plan of the Hyoju's Village and his House

水 野 信 太 郎*
Shintaro MIZUNO

I. は じ め に

本稿は童話作家・新美南吉（にいみ・なんきち、1913～1943）の代表作である「ごんぎつね」に登場する主要な建築物である兵十の自宅を空間として具体的に理解するための考察である。また兵十の家だけでなく、その家屋を取り囲んで形成されている「ごんぎつねの里」全体に広がる風景ならびに建造物群を明らかにしようとする試みでもある。その「ごんぎつねの里」構成要素中には、建築物だけでなく、山があり川がある。林も耕作地もある。これらの全てを総合的に視覚化する試みが、本研究の最終的な目的である。

当研究における基本的な姿勢は、新美文学としての原作「ごんぎつね」を最大の拠り所に据える点にある。それに加えて、愛知県に位置する知多半島の東側半分を成り立たせているこの地域の自然にも準拠する。当該地域一帯は新美南吉の故郷である。ここでの自然が意味するものには、地形と気候という両方の要素が含まれる。そのような自然環境に育まれて自然界の動植物が生息し、さらに人間たちは農業を主とする営みを継続していた。

II. 先行する絵画・画像資料

童話「ごんぎつね」は、ひとり新美南吉の代表作という位置づけにとどまらない。日本近代を代表する優れた児童文学の作品でもある。そのことを傍証する事柄として、すべてのわが国小学校国語教科書に採録されているという事実を挙げることができよう。つまり日本国内で教育を受ける児童は、小学校4年生で全員が童話作品「ごんぎつね」を学ぶこととなる。と同時に、早逝した童話作家・新美南吉という存在を知ることとなる。

また国語教科書に採用される時点だけでなく、幼児向けの絵本や少年少女向けの児童書が出版される段階では挿し絵も制作されてきた。それらは数多くの絵本作家や画家たちの手になる良好な作品群となって、今日わたくしたちの眼前に存在している。

それらは、原作に見られる「ごん」や「兵十」そして「村人たち」の挙動や足跡と照らしあわせた場合、全く無理や矛盾が生じない位置関係で絵画化されているものばかりではない。し

* 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

かし、いずれも作家たちが丹誠を凝らして描いた精緻な作品群であることは間違いない。これらの事実を受けて筆者としては、それらを謙虚に見て、さらに深く読みこむ価値があると考えている。そのうえで時代背景を考慮しながら、建築歴史学の専門家として各作品を解釈すべきだという立場である。以上のような視点から、考察の対象となり得る「ごんぎつね」作品をできるだけ多数にわたり蒐集することを試みた。勿論、本稿で披瀝する通り、それらの結果が管見に過ぎないことは詫びておきたい。

以下に順を追って各作品を掲げる。掲載する順番は、制作された年代順を基本とする。ただし同一の画家が描いた作品に関しては、より遡る年代にしたがって複数の作品を並列して掲載する。より後世ではなく古い時代にならべて同一の画家を紹介する理由は、当該画家が「ごんぎつね」に対して、いつ頃から制作意欲を有していたのかを示す目的からである。

満30歳に満たない短命で終わった新美南吉であるが、自身が生前その挿し絵作品を目にし、承知をしていた画像が残されている。それは「ごんぎつね」が発表された『赤い鳥』第3巻第1号の挿し絵である。その挿し絵を描いた画家は深沢省三（ふかざわ・しょうぞう、1899～1992）であり、発行された年代は昭和7年の1月1日であった。深沢省三という画家は東京美術学校（現在の東京芸術大学美術学部）西洋画科の出身で、鈴木三重吉（すずき・みえきち、1882～1936）が主宰する童話童謡雑誌『赤い鳥』の挿し絵を担当していた。

深沢省三夫妻と鈴木三重吉との交流は、省三の妻である深沢紅子（ふかざわ・こうこ、1904～1993）が記した文章から窺い知ることができる¹⁾。その手記によれば、目白時代の赤い鳥社の近くに深沢夫妻が借家住まいをしていた頃からの交流であるという。幾度かの転居後も、その都度「引っ越し祝い」と称して酒を三重吉自身が持参したとのことである。なお紅子の手記には「赤い鳥」関係者だけでなく、主として彼女自身が交流した詩集『四季』のメンバーである立原道造（たちはら・みちぞう、1914～1939）や堀辰雄（ほり・たつお、1904～1953）らの素顔も描かれている²⁾。立原は新美南吉のちょうど1年後の全く同じ日である7月30日に誕生している。そして早逝であった点に関しては、南吉よりもさらに若い満24歳で他界した。

深沢省三による最初の「ごんぎつね」作品は全部で4点ある。その内、建築物が描かれている絵柄は2点である。図-1に示すのは、いわし屋に殴られて頬に傷を負った兵十を、ごんが兵十の家の裏口から覗き見ているようすである³⁾。兵十の背後にある壁は、左下の隅角部が傷んでいる。その状態からは、当該壁面が板壁ではなく塗り壁、つまり土壁であると見受けられる。この場合、裏口とは言いながら実体は、床の高さに設けられた「掃き出し」の窓である。

加えて図-2は「兵十の家」の裏口を左方向に見ながら銃を手にする兵十の姿である⁴⁾。この家には背面に縦格子を構える窓が設けられている。これら屋内の土壁と外壁の格子窓については、童話の作者である南吉が生前から認知していたという事実を尊重することとしたい。

以下は新美南吉没後の絵画作品である。図-3から6は深沢省三の作品である。図-3は兵十の家の板張りの床に、ごんが盗んできたいわしを置くところである⁵⁾。右手に柱が描かれている。おそらく独立して建つ柱であろう。図-4は兵十が一人で昼食をとりながら呟く場面であ

ある⁶⁾。この絵には囲炉裏が明示されており、自在鉤^{じざいかぎ}と、その自在を天井から吊るすための「あま（天か）」ないし「あまだ（天棚か）」あるいは「ひだな（火棚か）」と呼ばれる木製の部材が描かれている。彼が食事をする部屋の床仕上げ材は、板張りのようである。図－5は物置あるいは納屋と原文で表記されている付属屋にいた兵十が、家の中へ裏口から入ったごんぎつねを打つために、火縄銃を手にした瞬間である⁷⁾。物置には臼と藁打ちの道具が置かれている。そして兵十の家の裏口には、土台が構えられていることも判る。それから図－4および5に共通して奇異に感じられる点は、いずれも兵十が左利きとして表現されていることである。本稿の内容に直接かわりはないが、深沢省三の直筆画を掲げておく⁸⁾。この絵は建築物ではないが、彼が直接書籍の見返しに描いた絵画である。同書は深沢の故郷である盛岡市内で入手した。

図－7以降の図に関しては、深沢省三以外の画家たちの作品である。以下、画家たちが作品を発表した年代順に「ごんぎつね」関連作品を掲載する。その総数は図－7から26の計20作品である^{9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25) 26) 27) 28)}。

以上が現在までに絵画化された童話「ごんぎつね」の世界である。これまで見てきたように「兵十の家」については、その外観が多様な姿として発表されてきた。特に家の表側の状況と母親の葬式当日のようすは、墓地への葬列を含めて様々な画家たちの手によって描かれてきた。一方、家屋内のようすは、兵十が午飯をたべかけながら独り言をいう場面に登場する。同様に家の裏口も絵として描かれた事例が少なくない。なお本稿では一例しか掲載しなかったが、井戸端で兵十が麦をとぐ姿も描かれている²⁸⁾。

なお本稿では写真を割愛したが、掲載した作品のほかにも「ごんぎつね」の世界を描いた画家たちは少なくない。小坂茂（大日本図書，1956年），鈴木寿雄（フレーベル館，1967年），南伸坊（岩崎書店，1971年），若山憲（ポプラ社ポプラ文庫，1978年4月），福田庄助（岩崎書店フォア文庫，1980年11月），永田萌（講談社，1991年8月），柿本幸造（講談社，1991年8月），宮田奈穂（岩波少年文庫，2002年4月18日），遠藤てるよ（大日本図書，2005年3月），みや（じゃぶじゃぶ紙芝居シリーズ，2007年3月1日），ささめや ゆき（講談社青い鳥文庫，2008年），あやか（角川つばさ文庫，2014年3月17日），池田げんえい（角川書店，2014年8月1日），メイブ（Pictioのミニ紙芝居，2015年4月25日），安武わたる（角川書店，2016年2月12日），千野えなが（学研プラス，2017年9月），岩本康之亮（ひさかたチャイルド出版），室田里香（南吉オリジナル版），スガハルほかである。

Ⅲ. 「ごんぎつねの里」の空間理解

次に当該童話作品に登場する地域一帯と兵十の家について、具体的な位置関係ほかを考察しておきたい。まず物語の冒頭において作者は、

これは、私が小さいときに、村の茂平といふおぢいさんからきいたお話です。

むかしは、私たちの村のちかくの、中山といふところに小さなお城があつて、中山さまといふおとのさまが、をられたさうです。

図-1 『赤い鳥』深沢省三さし絵ごんと兵十³⁾図-2 同前の深沢省三による兵十の家の裏口⁴⁾図-3 深沢省三のさし絵いわしを運んだごん⁵⁾図-4 深沢省三による午飯をとる兵十とごん⁶⁾図-5 深沢省三のさし絵ごんを見つけた兵十⁷⁾図-6 『岩手の民話』にある深沢省三の直筆⁸⁾

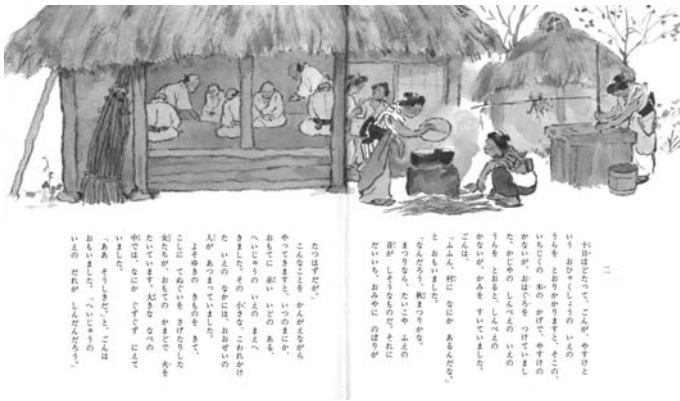


図-7 箕田源二郎作品による兵十の家の表側⁹⁾



図-8 箕田源二郎・教科書のごんを打つ兵十¹⁰⁾



図-9 黒井健の作品による「兵十の家」表側¹¹⁾



図-10 黒井健・教科書の「兵十の家」の裏口¹²⁾



図-11 村上幸一の作品による兵十の家の表側¹³⁾

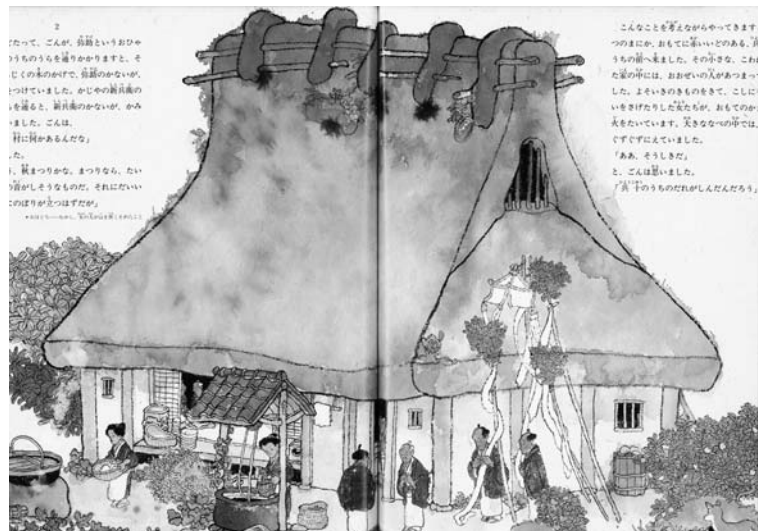


図-12 村上勉作品による「兵十の家」の表側¹⁴⁾

図-13 長野ヒデ子・紙芝居作品中の兵十の家¹⁵⁾図-14 長野ヒデ子・教科書さし絵の兵十の家¹⁶⁾図-15 かすや昌宏作品による兵十の家の表側¹⁷⁾図-16 かすや昌宏・教科書の兵十の家の裏口¹⁸⁾図-17 石倉欣二による午飯をとる兵十とごん¹⁹⁾図-18 諸橋精光・紙芝居による兵十の家表側²⁰⁾

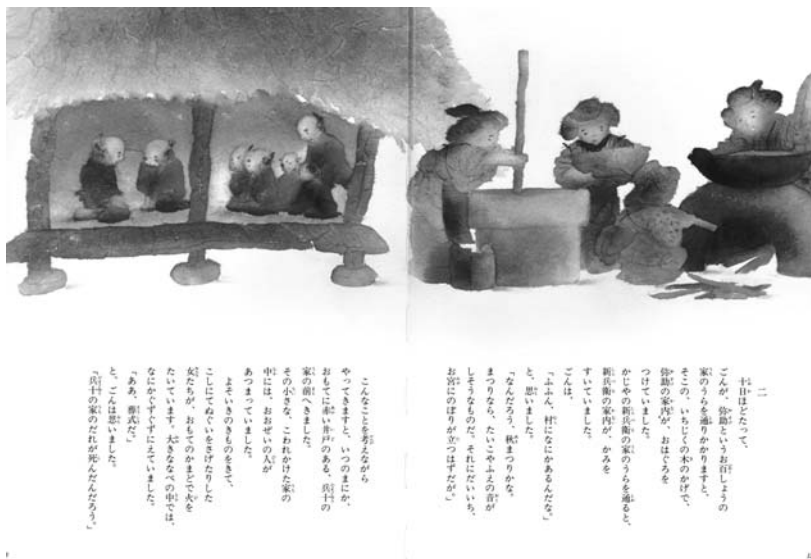
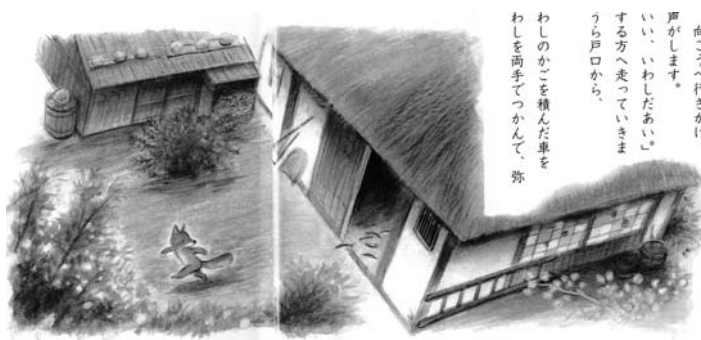
図-19 いもとようこ作品による兵十の家表側²¹⁾図-20 太田大八による午飯をとる兵十とゴン²²⁾図-21 狩野富貴子作品による兵十の家の裏口²³⁾図-22 松永禎郎による午飯をとる兵十とゴン²⁴⁾図-23 こうのみほ作品ゴンぎつねの最終場面²⁵⁾図-24 鈴木靖将の作品による兵十の家の表側²⁶⁾

図-25 武田美穂の作品による兵十の家の物置²⁷⁾図-26 ドリヤス工房による井戸まわりの兵十²⁸⁾

と最初に、ことわっている。つまり時代設定は近世紀、すなわち江戸時代であると考えられる。しかしIV. むすびで後述するように、近世紀の中でも「兵十の家」に関する記述と「火縄銃の存在」という双方の視点を鑑みて幕末期の物語であると理解される。童話は更に続けて

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐」と言ふ狐がゐました。ごんは、一人ぼつちの小狐で、しだの一ぱいしげった森の中に穴をほつて住んでゐました。

と明確に設定されている。この「ごんぎつね」の巣がある山は、今日では^{ごんげんやま}権現山と解されている。より詳細に述べれば愛知県知多郡^{あぐい}阿久比町^{ちやうえだいまりうしろ}植大森^{あぐい}後38の五郷社が所在する丘陵地である。

そして、夜でも晝でも、あたりの村へ出て来て、いたづらばかりしました。はたけへはいつて芋をほりちらしたり、菜種がらの、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとつて、いつたり、いろんなことをしました。

そのような「ごん」であるが、巣がある山には「しだ」だけでなく「栗」とともに「まつたけ」も実るようである。当然、栗の木やアカマツの林が構成されていることになる。この点に関しては、版画-1の左上部を参照されたい。

ごんは、村の小川の堤まで出て来ました。(中略)

ふと見ると、川の中に人がゐて、何かやつてゐます。(中略)

「兵十(ひやうじゅう：ひょうじゅう筆者追加) だな。」と、ごんは思ひました。(中略)

腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりといふ、網をゆすぶつてゐました。

とある。作中の小川は、愛知県半田市の北部に位置する^{やなべなかまち}岩滑中町(新美南吉の出生地)と北隣

の阿久比町との市郡界を構成する矢勝川^{や かがわ}がモデルとされる。版画では「はりきり網」の中にウナギを描き、画面の右方向を川下とした。この地形は南吉の故郷に準拠している。

（前略）ちよいと、いたづらがしたくなつたのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかゝつてゐるところより下手の川の中を目がけて、ぽん〜なげこみました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながらにごつた水の中へもぐりこみ^(ママ)しました。ごんぎつねが犯した、この些細な悪戯によって、のちに狐自身が悔いることとなる。

「兵十のお母は、床についてゐて、うなぎが食べたいと言つたにちがひない。（中略）ちよッ、あんないたづらをしなけりやよかつた。」
ということになる。

時系列は前後するが、再び版画－１に戻って「ごんぎつねの里」を検証したい。日時は、兵十の母親の葬儀の日である。

十日ほどたつて、ごんが、彌助といふお百姓の家の裏をとほりかゝりますと、そのの、いちぢくの木のかげで、彌助の家内が、おはぐろをつけてゐました。鍛冶屋の新兵衛の家のうらをとほると、新兵衛の家内が、髪をすいてゐました。ごんは、

「ふゝん、村に何かあるんだな。」と思ひました。

「何だらう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしさうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが。」

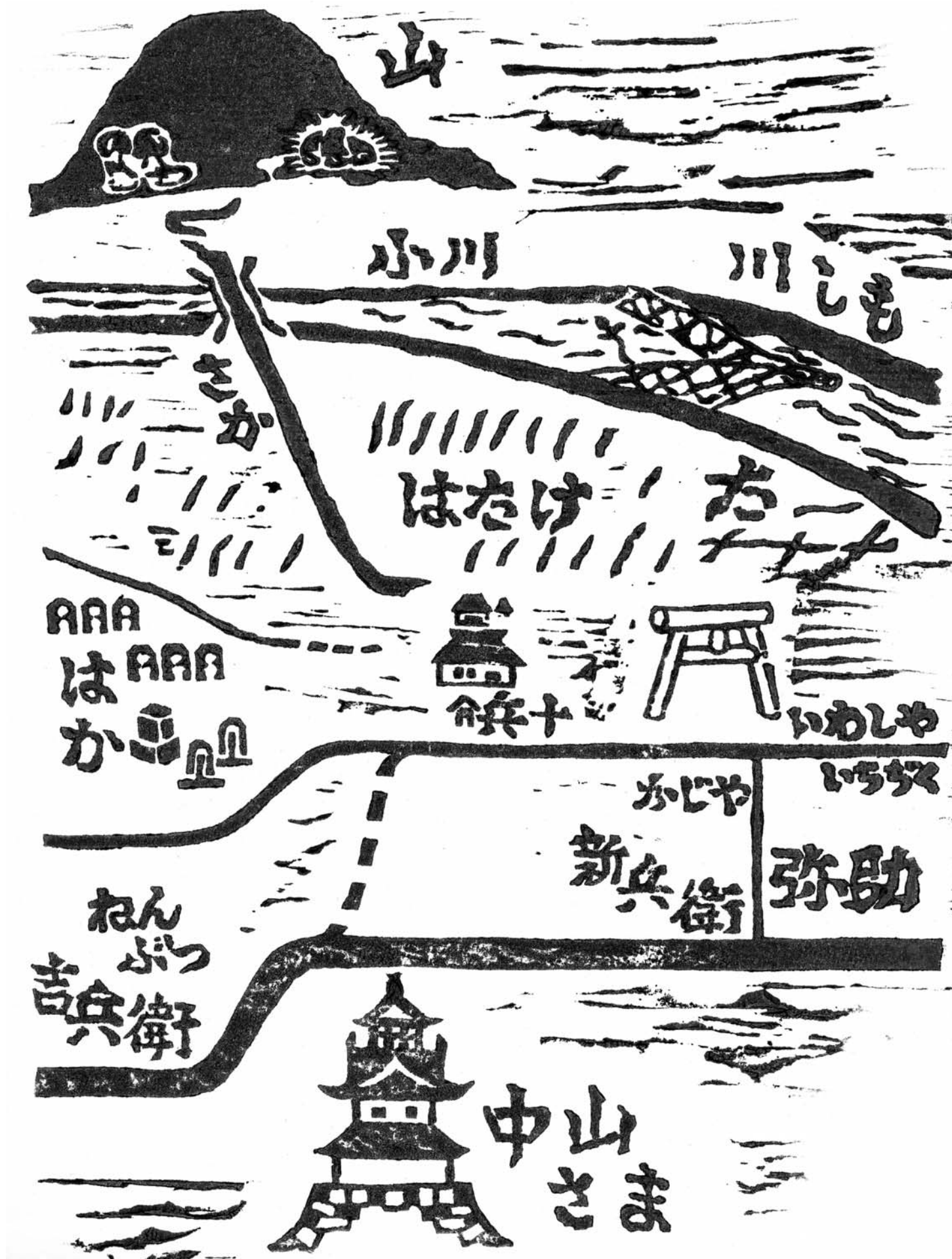
こんなことを考へながらやつて来ますと、いつの間にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こはれかけた家の中には、大勢の人があつまつてゐました。よそいきの着物を着て、腰に手拭をさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいてゐます。大きな鍋の中では、何かぐづ〜煮えてゐました。

「あゝ、葬式だ。」と、ごんは思ひました。

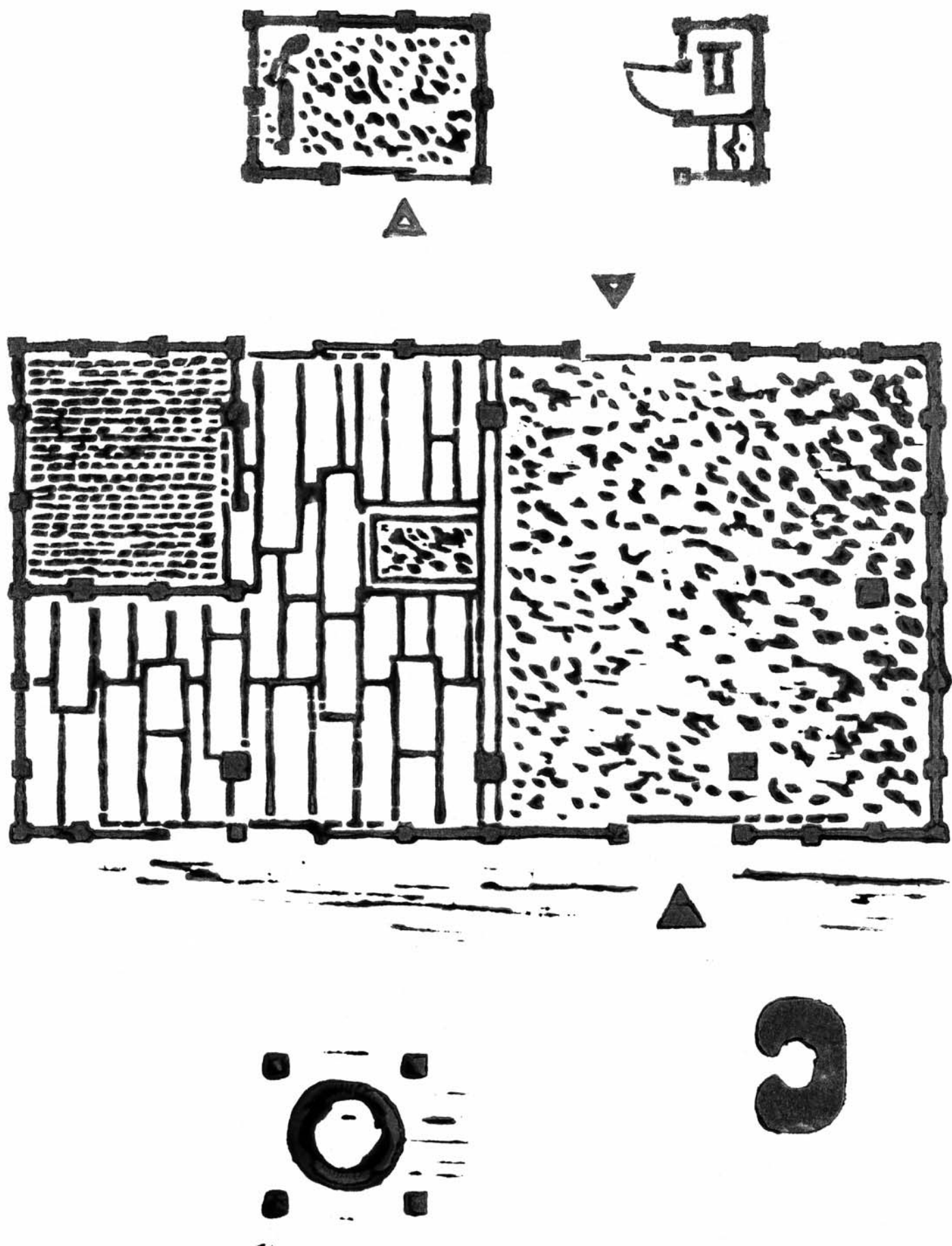
このように彌助^{や すけ}と新兵衛^{しん べ え}の家のいずれも裏側の様子や、兵十の家の前すなわち表通り側の光景が記述されている。原典を素直に読む限りでは、彌助の家の裏側に接している道を真っ直ぐ行くと、そのまま新兵衛の家の裏側に通じているようである。そして両家の裏道が、兵十の家の表に通じていることになる。その付近には神社があるのかもしれない。その点はともかくとして、記述されている光景をできるだけ盛り込んだ映像が版画－１の中段である。

一方で、明らかな項目もある。それは少なくとも兵十の家は、①小さい、②壊れかけている、③屋外の表側に「かまど」がある、という３つの特徴を有している。しかも同じく表側に設けられている井戸が「赤い井戸」とのことである。以上の事柄から知り得る項目は、兵十が金銭的に恵まれた階層には含まれないという点である。

その根拠は、規模の小さな家屋は歴史的に遡る可能性が高い形式の民家である。つまり新築された時代から長い年月が経過しているものと想像される。兵十の家は大規模な増改築もなされていまいやうだ。事実、こわれかけていると明言されている。そのような住宅に住み続けなければならない兵十が、建築費を潤沢に保有しているとは考えづらい。かまどが屋外に設置さ



版画-1 兵十の家ほかごんぎつねの里の鳥瞰図



版画－2 付属屋を含む兵十の家推定現状平面図

れている点に関しては、温暖な気候である知多半島といえども、やはり古い形態を残す事例である。火災の予防や煙の除去などの理由から、かまどを戸外に設ける時代はあった。しかし雨天や冬季の寒さなどに対応する理由から後世に至るほど、煮炊きの場が屋内のみへと変遷する。

もう一点、経済面での注目箇所を指摘しておきたい。それは井戸が「赤い」という記述である。かつて筆者は新美南吉の養家を調査することによって、結果的に「兵十の家」との違いを知る機会を得た。その体験によって両家屋を比較することが可能となった。その所見は、養家の井戸が円筒形の陶器製品によって地上部分を形づくられているという事実である。しかも、その円形陶管は施釉^{せゆう}されており、その色調は黒であった。この色は還元焼成された鉄の釉薬^{ゆうやく}すなわち鉄分を主成分とする上薬^{うわぐすり}が呈する色調であると判断している。南吉の養家は近世末の竣工であると考えられるので建築物と井戸の整備が同時期ならば、この黒色の井戸枠を製造した土地は、おそらく知多半島西岸の常滑一帯であるとみられる。製作年代から考えて、井戸まわりのように大きな陶磁器を製造することを得意としていた生産地は全国でもまだ少ない時期である。しかも地理的な近さを鑑みると、ほぼ間違いなく常滑製であろう。常滑は他の地域では製造が困難な大きな甕^{かめ}や土管などの窯業製品の焼成を優位性として誇っていた。

次に黒い井戸と赤い井戸の相違点を明らかにしたい。前述した通り黒色の陶管は還元焼成による。一方、兵十の家に据えられている赤い井戸は、酸化鉄が呈する色調である。窯の中で焼き上げられる最終段階で、赤い製品は外気が大量に入り込む窯で焼けばよい。しかし還元焼成によって黒い品を焼き上げる際には、窯全体を密閉して酸欠状態を保たなければならない。このため焼成工程にも設備にも困難が伴う。その製品が大振りな品である場合には、なおさらである。したがって焼きあげられた製品の価格にも影響する。結果的に、黒い井戸は赤い色の井戸よりも高価な品となってしまう。赤い井戸しか購入することが叶わなかった兵十の家は、やはり経済的に裕福ではなかったことを暗示している。しかも兵十の家に使われている赤い井戸は釉薬を施していない素焼きの無釉製品であろう。陶土^{とうど}そのものに含まれている砂鉄が、焼成時に酸化したため発した素地の赤色である。いわば赤さびの色と同じである。今日、黒色の煉瓦は施釉ではなく、マンガンを含有して製造される。

版画－１の根拠説明にもどる。

お午がすぎると、ごんは、村の墓地へいって、六地藏さんのかげにかくれてゐました。

いゝお天気で、遠くの向うにはお城の屋根瓦が光つてゐます。(中略)と、村の方から、カーン、カーンと鐘が鳴つて來ました。葬式の出る合圖です。

この記述によって集落からは少し離れた場所に墓地があるのだが、そこからでも中山氏の居城を見通すことができることが理解される。経済的に裕福ではない兵十の家の所在地も、おそらく村のはずれに位置している事であろう。したがって兵十の家の裏手は、すぐに畑に面している可能性が高い。換言すれば、ごんの巣穴からは最も近い住戸が兵十の家となる。

以上の要素を版画－１の中段に彫り込んでいる。さらに墓の表（南）側であるのか、はるか後（北）方であるのかは不明だが、この村はずれを経て左方向に向かう往還が通じている事で

あろう。現実の半田市にあっては、西方の^{おおのまち}大野町へと至る大野街道が存在する。大野町（現・常滑市内）は知多半島の西海岸で最も栄えていたまちである。南吉の作品に「おぢさんのランプ」という有名な童話があるが、その話の中に登場する半田池（矢勝川の上流）も大野街道に沿っている。

逆に版画－1中段の右端には「いわし屋」が車を止めて、弥助の家に魚を売る場面がある。いちぢくの木がある裏側である。いわしは、よわし（弱し）が転じたもので、いたみやすい魚である。この土地が海からさほど遠くないことを感じさせる。

（前略）兵十の家の裏口から、家の中へいわしを投げこんで、穴へ向ってかけもどりました。途中の坂の上でふりかへつて見ますと、兵十がまだ、井戸のところで麥をといでゐるのが小さく見えました。

という。版画には兵十の家の^{おもや}母屋（主屋）が邪魔をすることなく、「さか」から「赤い」井戸を見通すことが出来るように表現した。次に、版画－1の下段と左隅に関する箇所を原典から引用する。

月のいゝ晩でした。ごんは、ぶら〜あそびに出かけました。中山さまのお城の下を通つてすこしいくと、細い道の向うから、だれか来るやうです。（中略）

吉兵衛といふお百姓の家まで来ると、二人はそこへはいつていきました。（中略）窓の障子にあかりがさしてゐて、大きな坊主頭がうつつて動いてゐました。ごんは、

「おねんぶつがあるんだな。」と思ひながら井戸のそばにしゃがんでゐました。

ここでは吉兵衛の家の建具が、和紙を貼った明り障子戸であることが判明する。ただし、その開口部（窓や出入口）が家屋の南側なのか北側なのかは不明である。一般的には念仏を唱えるための仏壇は、家屋の中央部よりも南側に配置されることが多い。また帰路に注目したい。

（前略）ごんは、二人の話をきかうと思つて、ついていきました。兵十の影法師をふみ〜いきました。

とあるので、吉兵衛の家は兵十の家よりも西の方角にあると考えられる。その理由は宵の時刻に帰路を歩む際の描写において、人間の影を追いかけるという事実による。文章から満月の夜だと解釈されるので月は日没後、間もなく東の空から昇る。満月の夜ならば、遅くない時刻の月は東の空にある。すると兵十と加助の二人の影は、東から照らす月の光を受けて西の方角へ延びる。ごんは帰路、兵十たちの影を踏む方向から二人について行ったという。それは西側から東の方向である。したがって吉兵衛の家は兵十の家よりも西の方角にあることになる。

IV. 「兵十の家」の平面形状の根拠

本章では兵十の家の間取りを考察する。家屋の平面図を版画－2に示す。床面積の半分を土間が占める。これは愛知県内のみに限らず、岐阜県を含む濃尾平野一帯にみられる農家建築の古い形である。最も古い形式の民家では、床板を張った部分がワンルーム型として始まる。しかし次の段階で図示するような部屋が一室のみ区画される。17世紀である。この室名は「なん

ど・納戸」あるいは「ねま・寝間」と呼ばれた。納戸とは貴重品の収蔵場所であり、寝間は就寝室である。歴史的には最初に成立した最もプライバシーが高いコーナーである。兵十の家には、おそらく母親の寝室であったと考えられる。納戸の出入口が片引き戸で仕切られている。その出入口の延長上に、囲炉裏を構えた。温暖な気候である知多半島において、実際に炉が切られているか否かは議論の余地がある。しかし兵十が昼飯時ここに座り、その横顔をごんに見られる。その位置に囲炉裏がある。

いわし屋だけでなく人類の9割が右利きである。片手で扱うレンズ型（レモン型）のお玉じゃくし：レードルの大半は、右手用である。ホモ・ハビリスの頃から言語野（左脳）を発達させ、右半身を使いこなしてきた結果と言われる。兵十を盗人と思ったいわし屋は自分の右腕で、向かい合った兵十の顔を殴る。その結果、兵十は左頬を打たれた。囲炉裏の前で土間方向に座していた兵十は、傷ついた左の頬を北側の戸外から、ごんに見られたのである。

版画－2 兵十の家の平面図には、外壁の柱から内側に入ったところに独立した太い柱が7本建っている。これらを上屋柱じょうやばしらという。そして外壁を構成する柱は、下屋柱げやばしらと呼ばれる。竪穴式住居の形式から家屋を大規模化する時点で、中央部分を上屋じょうやとして高く築き、その周囲を下屋げやで囲んで補強する工夫をした痕跡である。外壁面の下屋柱は外側に位置するので別名を側柱がわばしら、内側の上屋柱は入側柱いりがわばしらとも呼ばれる。これら上屋柱：入側柱は大きく、しかも7本であるため巷間では「七福神」に例えられることもあった。後世の大黒柱などであろうか。

兵十の家は、構造（骨組）的には「鳥居建」とりいだてに分類される。この名称は建築学研究者が名付けたものかもしれない。居住している人々が、このように呼んでいる事例はないとの見解さえあるからだ。鳥居建の由来は、上屋柱を鳥居の柱に見立てる。2本の柱の上部に、上下2段の横架材（梁）おうかざい（はり）を架け渡す。この形が神社の鳥居を連想させることから、その名が付けられた。

ちなみに兵十の家の外壁と窓について言及しておきたい。主出入口は土間にある南側の引き大戸である。その反対側に小さな裏口の片引き戸がある。それ以外の開口部としては、床の高さにある片引き戸がある。いずれも板戸を想定している。念仏の吉兵衛の家は和紙を貼った明り障子を構えていたが、兵十の家はそれよりもさらに古い形式ですべて板戸である。だから採光を得るためには、雨天時でも冬季間でも戸を開放しなければならない。また縦の格子窓については図－2 深沢省三による発表時の絵を尊重して、裏口の脇に、土間に向けて設けるものとする。納戸（兵十の母の部屋）などは北側の土壁に窓を持ちたいものであるが、寝室として使われたので窓が付けられる時期は相当に遅れる。

兵十の家は物置など明らかに母屋とは別棟の付属屋がある。その事例は、南吉生家や現存しないが離れ、さらに養家の蔵にも見られる。つまり「ごんぎつね」の里と兵十の家は、新美南吉生い立ちの世界に由来する空間なのである。なお版画－2の上段右側に配した便所については、現在公開されており筆者が2013年に実測調査をお許しいただいた新美南吉生家の屋外便所を参考にして提案した。また北側という便所の位置は兵十の家の場合、耕作地に近いため農作業の面で有利である。

IV. む す び

これまで記したように本研究において童話「ごんぎつね」に登場する「ごんぎつねの里」ならびに「兵十の家」の双方について、空間として具体的に掘り下げてきた。その研究手法の基本は、原典である作品「ごんぎつね」を引用しながら、その内容に基づいて空間を理解し、具体的空間を構築することであった。くわえて新美南吉のふるさとである愛知県半田市と同市の北側に隣接する阿久比町に及ぶ一帯の環境的連なりを尊重した。その研究成果が版画－1および2である。都市史の分野からも、また建築史の領域から見ても妥当な結果を導き出すことができたと考えている。

結論として兵十の家は古い形式をとどめている。このように古い家屋に住み続けなければならないという現実を抱えているのが兵十である。

しかし一方には大きな矛盾が生じる。それは決して裕福とはいえない兵十の家に、火縄銃が導入される時期である。実情は相当に遅れたことと考えられる。これら相反する2要素を勘案すると、やはり「ごんぎつね」は幕末期の話であろう。

本研究を進めるに際して多くの方々から御指導や、お力添えをいただいた。衷心より感謝申しあげる。新美南吉記念館の遠山光嗣学芸員、かみや美術館の神谷弘子氏、半田市教育委員会関係者各位、愛知県の民家に関する保存工事の資料と助言を頂いた野口英一朗氏ほか多数の方々におん礼を申しあげる次第である。また北海道立図書館、江別市立情報図書館、北翔大学図書館においては新美南吉関連蔵書の閲覧と貸出を許された。重ねて謝意を示すものである。

最後になってしまったが、本学の版画室を使用させていただいたおかげで木版画2葉を完成することができた。例年の事ではあるが、研究ならびに作品制作の面で恵まれた環境にあることを感謝するものである。

注

- 1)『随筆集 絵のある詩集』深沢紅子，熊谷印刷出版部，昭和49年3月23日
- 2)前掲『随筆集 絵のある詩集』ならびに『深沢紅子随筆集 追憶の詩人たち』深沢紅子，教育文化センター，1979年11月10日
- 3)「ごん狐（童話）」新美南吉，『赤い鳥』一月号，編輯兼発行人・鈴木三重吉，発行所：赤い鳥社，昭和7年1月1日，P-23. さし絵は深澤省三
- 4)前掲「ごん狐（童話）」，P-26. 同様に，さし絵は深澤省三
- 5)「ごんぎつね」新美南吉，『きつね と てぶくろ』著者 新美南吉，画家 深澤省三，発行所 大日本図書，1973年6月20日，P-18
- 6)前掲『きつね と てぶくろ』P-20
- 7)前掲『きつね と てぶくろ』P-29
- 8)『日本の民話 2 岩手の民話』編者 深沢紅子・佐々木望，カバー絵・さし絵 深澤省三，発行所 未来社，1967年9月30日，表紙の見開き：表2

- 9) 『おはなし名作絵本 1 ごんぎつね』著者 新美南吉, え 箕田源二郎, ポプラ社, 1969年2月, PP.10-11
- 10) 「ごんぎつね」新美南吉, 『ひろがる言葉 小学国語 4 下』著作者 田近洵一・北原保雄・三木卓, 教育出版, 絵 箕田源二郎, 平成25年6月20日, P-41
- 11) 『ごんぎつね』作・新美南吉 絵・黒井健 装幀・村上勉, 偕成社, 1986年9月1日, P-13
- 12) 「ごんぎつね」文 新美南吉, 絵 黒井健, 『新編 新しい国語 四 下』著作者 角野栄子・小森茂・西本鶏介ほか32名, 東京書籍, 平成22年7月10日, P-74
- 13) 『日本おはなし名作全集 第12巻 ごんぎつね』編集者 相賀徹夫, 絵 村上幸一, 小学館, 1989年10月1日, P-81
- 14) 「ごんぎつね」新美南吉 文・村上勉 絵, 『日本名作絵本〔特装版〕23』新美南吉, ティビーエス・ブリタニカ, 1993年1月1日, PP.30-31
- 15) 『紙芝居 ほのぼの新美南吉ランド ごんぎつね』脚本 清水たみ子, 画 長野ヒデ子, 童心社, 1994年5月10日, 第4景
- 16) 「ごんぎつね」新美南吉 作, 長野ヒデ子 絵, 『小学生の国語 四年』著作者 中洩正堯ほか38名, 三省堂, 平成23年2月25日, P-125
- 17) 『ごんぎつね』新美南吉 作・かすや昌宏 絵, あすなろ書房, 1998年6月20日, PP.16-17
- 18) 「ごんぎつね」新美南吉 作・かすや昌宏 絵, 『国語 四 下 はばたき』著作者 甲斐睦朗ほか四十一名, 光村図書出版, 平成27年6月5日, P-17
- 19) 『ごん狐 新美南吉童話傑作選』新美南吉／作, 石倉欣二／絵, 発行所／小峰書店, 2004年6月7日, P-31
- 20) 『名作児童文学紙芝居 ごんぎつね 24場面』作 新美南吉, 脚本・絵 諸橋精光, 鈴木出版, 2005年1月15日, 第8景
- 21) 『ごんぎつね』文 新美南吉・画 いもとようこ, 金の星社, 2005年5月1日, PP.12-13
- 22) 「ごんぎつね」新美南吉, 『21世紀版少年少女日本文学館 13 ごんぎつね・夕鶴』挿し絵 太田大八, 講談社 編集, 講談社 発行, 2009年3月19日, P-17
- 23) 「ごんぎつね」新美南吉, 絵 狩野富貴子, 『小学国語 4 下』著作者 前田富祺・向川幹雄・中洩正堯ほか16名, 発行所 日本文教出版, 平成22年6月8日, PP.26-27
- 24) 「ごんぎつね」新美南吉, 絵 松永禎郎, 『みんなと学ぶ 小学校 国語 四年 下』著作者 浜本純逸・大岡信・野地潤也ほか23名, 発行所 学校図書, 平成22年7月1日, P-15
- 25) 「ごんぎつね」新美南吉, こうの みほ, 『カラー版 ママおはなしよんで 幼子に聞かせたいおやすみまえの365話』2011年9月22日, P-49
- 26) 『ごんぎつね』新美南吉, 鈴木靖将, 新樹社, 2012年3月30日, PP.15-16
- 27) 『新美南吉童話選集 3』新美南吉, 挿し絵 武田美穂, ポプラ社, 2013年3月, P-23
- 28) 「ごんぎつね」新美南吉, 『有名すぎる文学作品をだいたい10ページくらいの漫画で読む。』ドリヤス工房, リイド社, 平成27年9月17日, P-154